
ラジオ番組表から見える市民の「戦場」

～太平洋戦争下における銃後のメディアリテラシー～

川村 誠

NHK 放送博物館館長

1章 はじめに

太平洋戦争開戦を告げる放送は1941年12月8日午前7時に行われた。NHK 放送博物館に保存されている当時の番組表を見ると¹⁾、当日になって予定されていた番組を変更して臨時ニュースが繰り返し放送されたことがわかる。記録によるとこの日の放送は通常通り午前6時から始まったが、本来は6時30分に放送されるはずだった天気予報が中止となりレコード音楽が流された。(この日以降、天気予報は終戦まで放送から姿を消す)このあと午前7時の開戦の一報に続き次々と大本営発表の臨時ニュースが放送される²⁾。真珠湾攻撃の成功とシンガポール爆撃のニュースは午前11時半に放送されている。日本軍の奇襲攻撃による各地の戦果が次々と伝えられると人々はラジオにくぎ付けになり、真珠湾攻撃成功の速報で市民の開戦による高揚感は一気に爆発した³⁾。ここから日本の放送は国民を戦争に駆り立てる手段として存在感を高めていく。

戦況を伝えるニュース、東条首相をはじめとする政治家の演説、戦時下の生活の心構えを伝える生活情報、時には音楽番組やラジオ劇も含めて放送は戦時色に染まっていく。さらにいわゆる少国民に対する愛国教育を目的とした学校向け番組である「国民学校放送」や「少国民の時間」が銃後の子どもたちの戦時教育に利用されていく。この当時言論は情報局による統制下であり、当然ながら自由な取材・表現などは許されなかった。必然的に放送の内容は軍

部にとって都合の良い情報のみが国民に伝えられることになる。そのような情報を一般市民はどのように受け止め、どのように世論が形成されていったのか。

現在の放送法に基づく特殊法人日本放送協会(現NHK)の前身にあたる社団法人日本放送協会が発行していた雑誌『放送』や『放送研究』に毎号掲載されていた投書欄を読むと、この時代の放送を市民はどのように聞き放送に対してどのようなことを望んできたのか、その一端を知ることができる。これらの限られた史料の中には、軍部の圧力の下で放送が形作られただけでなく当時の国民が望むように放送が変容していった様子が見えてくる。もともと開戦直前まで多くの国民が欧米の音楽・文学など様々な文化を好ましく受け入れていたにもかかわらず、わずかな期間で欧米への敵意が沸騰する過程は異様でもある。ここに市民に限られた情報の中から時局に合わせて世論形成していった理由を探ることはできないか。

本稿では当時のラジオ番組表に残された戦時番組を概観し、その番組を一般市民がどう理解し放送に何を望んでいたのかを、現代のメディアリテラシーを考える上での論点を示唆するものとして、当時の番組表をはじめ各刊行物の中から考察する。なお本稿では「日本放送協会」は社団法人時代の日本放送協会を指し、現在の特殊法人はNHKと表記する。

2章 戦時色に染まっていく放送

日本のラジオ放送は1925年3月22日、東京芝浦にあった東京高等工芸学校内に作られた仮放送所から始まった⁴⁾。きっかけはこの2年前に起きた関東大震災の経験から、正しい情報をいち早く伝える手段として放送の必要性が高まったことによる。放送は開始直後から英会話講座やラジオ劇、音楽番組などそれまで一般市民が触れる機会の少なかった文化的な機会を広く発信することで社会の形を変えていった。放送は国民の知的好奇心を刺激すると同時に、都会や地方の差を縮め教育の機会均等にも貢献しながら発展を遂げる。こうして大正時代に始まった放送は文化的・知的な成果をあげながら聴取者の拡大につなげていった。まさに国民の生活水準向上に放送は活用されていた。

その放送の質が大きく変わったのが1936年に起きた二・二六事件である。反乱軍の兵士に対して投降を呼びかけた「兵に次ぐ」の放送は騒動を収めるにあたり絶大な効果を発揮した。この体験から軍部をはじめとした行政はラジオ放送の政治利用を加速していく⁵⁾。

まず1931年の満州事変以降、軍部・官僚の専断政治の時代に入るとそれまで穏やかだった放送は少しずつ戦時色を帯びていく。ただこの当時の放送番組表を見ると、まだ番組としてはニュースや気象通報のほかには料理番組などの生活講座や音楽番組がほとんどで、軍人や官僚が放送に登場する番組はほとんど見当たらない。一般市民はまだラジオから一般ニュースのほか娯楽や教養を中心とした情報を得ていた時代でもある。

さらに変化が現れるのはヨーロッパでナチスドイツが台頭してきてからである。この頃から日本放送協会が発行していた研究誌『調査時報』にはナチスドイツの放送政策について多くのレポートが掲載されていた⁶⁾。ナチスによる放送の政治利用は日本の放送政策の手本となっていた。

特に『調査時報』(1933年6月1日号)ではナチスの放送利用の実態を詳細にレポートしている。その中で「ヒトラーの政権演説はレコードにとられ、

各放送局から数回再放送された。」「政治放送が完全に主権を握ったのである」といった現況のほか、放送の管理主体が逓信省、内務省の管轄から新法令によって宣伝省大臣の管轄することになったことについても詳細に報告されている。

日本の放送のプロパガンダ利用はこうしてナチスドイツの研究によって確立していった。中でも国策会社としての通信社が配信するニュースや政治家の演説を繰り返し録音で放送するといった施策はナチスドイツの手法を取り入れたものだった。こうして「国民本位の放送」は「国家本位の放送」へと変容していく⁷⁾。

1937年に盧溝橋事件をきっかけとして日中戦争がはじまると、放送は一気にプロパガンダの手段となっていく。事件が発生した7月7日のラジオ放送は1日4回のニュースの時間をフルに使いこの事件について繰り返し放送した。さらに事件に関する情報は同年7月31日までに21回、41件の臨時ニュースとして放送され、7月中の全国ニュースのうち約70%が盧溝橋事件に関するものだった⁸⁾。市民は繰り返し放送される事件のニュースに耳を傾け、やがて市民の間に戦況が最も知りたい情報として浸透していく。放送の戦時体制はこうした市民感情と政権の思惑とが両輪となって作り上げていった。『放送五十年史』(NHK)によると当時の日本放送協会が出征軍人の家族に対して行った「放送への希望調査」(今でいうアンケート)によると、戦況ニュースは可能な限り詳細に、また軍隊が派遣されている地域の気候、人口、さらには人々の生活に至るまで出征者にかかわる情報はすべて放送してほしいという希望が寄せられた。加えて、できれば前線に派遣されている兵士の声が聞きたいという要望も多かった⁹⁾。

こうした聴取者の声を反映して始まったのが戦地と銃後の国民をつなぐ番組である。太平洋戦後に始まった「前線に送る夕(ゆうべ)」はその代表的な番組だが、こうした番組は既に日中戦争時から放送されていた。それが1938年1月から始まった「前線将士慰問の夕」である。内容は浪曲、落語、講談などの演芸をはじめ、歌謡曲など音楽プログラムも

盛り込んだ娯楽性の高いものだった。この番組は国内向けだけでなく、短波放送を通じて中国大陸の前線に向けて放送された。ただし前線では実際にこの放送を聞いた兵士たちは限られた人数しかいなかったのではないか。なぜなら前線で行動中の兵士は当然ラジオを聴いている余裕などなく、後方部隊の兵士も受信機の配備はほとんどなかったからである。加えて大陸での電波状況は良好ではなかったことを考えると、前線に向けた放送とはいえ肝心の前線の兵士たちの聴取は限られており、実際に放送を耳にしたのは一部の通信兵だけだったと考えられている¹⁰⁾。つまり「前線と銃後を結ぶ放送」は前線兵士への慰問というよりも、「銃後」の国民が戦争に協力していく手段としての番組である点に重きが置かれていたとみることができる。これは後節でさらに考察する。

3章 放送を通じた開戦の歓喜

前述の通り戦時下の日本の放送はドイツにおけるラジオ番組を参考にしていた。では放送の変容を一般聴取者はどう感じていたのか。当時の国民の本音を探ることはなかなか難しいが、少なくとも当時の放送に対する評価は時局雑誌『放送』や研究雑誌『放送研究』の中に掲載されていた投書欄から考察できる¹¹⁾。

『放送』『放送研究』はどちらも日本放送協会が発行していた月刊誌で、『放送』は1941年10月にそれまで『ラジオ講演・講座』という題名で発行されていた雑誌を改題したものである。その内容はラジオで放送された講演や演説を記事として再掲したもので、いわゆる番組のテキストとして発刊されていた。新たに出版された『放送』は放送というタイトルではあるが放送番組に関する紹介とあわせて、時局の話題を官僚や軍人がラジオで講演した原稿を改めて記事にしたものが大きく誌面を占めており「時局雑誌」と名乗っていた。実は以前から『放送』という雑誌は発行されていたが、もともとあった旧『放送』は同じく1941年10月に『放送研究』と改

題し、こちらはその名の通り放送の技術や文化的側面からの研究記事を中心にした雑誌として生まれ変わった。元々は『調査時報』として大正時代から発行されていた放送研究の専門誌である。ただ『放送』も『放送研究』も時局に合わせて記事の内容は基本的に戦争完遂のための放送の役割を国民と共有する、またそのための研究を目的としたもので一部の記事は重複しているものもあった。

『放送』(1942年2月号)の冒頭で、太平洋戦争開戦当日の正午から放送された東条英機首相による「大詔を拝し奉りて」の演説全文が掲載されている¹²⁾。今でいうメディアミックスであるこの雑誌が、放送を聞けなかった市民に対して文字として放送を通じたプロパガンダを広める役割を果たしていた。「大詔を拝し奉りて」の録音は開戦後大勢翼賛運動の一つとして毎月8日に制定された「大詔奉戴日」の朝に、東条内閣が総辞職する1944年7月まで「開戦の勅書」の朗読とともに毎回繰り返し放送された。ナチスドイツがヒトラーの演説を繰り返し放送したのと同じ手法である。

この放送を聞いた聴取者からの投稿について『放送研究』(1941年12月号)の「一頁研究 反響」¹³⁾に次のような記事がある。

「ラジオのありがたさを今ほど感じたことはない。心躍る戦況に感謝」の声は多数寄せられ「ニュース放送に際し聴取者に起立を宣(せん)してほしい」の意味のものが非常に目立つのも国民の真摯な態度をうかがえると思う。これと並行して「絶え間のない軍歌の放送が騒々しい」との非難が少なからず集まっている。内容を見ると現代の軍歌はいわゆる流行歌調でしかも女声の震え声でやかましいというのと、ニュースは聞きたいし音楽はうるさいし、スイッチを止めておくと大切なニュースを聞き漏らすと訴えている。

開戦の興奮が国民の間に広がっていたことを象徴する聴取者の声だが、一方で繰り返し流される軍歌が騒々しいという批判的な意見もあったことは興味

深い。また女性歌手による流行歌調の軍歌に対する不評意見もあり、個々の意見の主旨・内容は別にして今も昔も番組に対する一般市民の声は共通するものがある点も面白い。ただしこうした音楽など演出上の批判的な声も含めて多くの国民は太平洋戦争の開戦を大きなイベントとして、放送から伝えられる日本軍の戦況に歓喜していたのである。

この翌号『放送研究』（1942年1月号）の「反響」では開戦後一か月間に寄せられた聴取者の声をまとめている¹⁴⁾。以下はその一部である。

戦争完遂への力強い講演は特に数多く組まれているが、少国民の時間に、家庭婦人の時間にいずれも嘖々（さくさく）たる声で迎えられ、二十五日小笠原長生子（子爵）「ハワイ真珠湾の思い出」、十八日鶴見祐輔氏「大東亜戦争と少国民の覚悟」には絶賛が集まった。（中略）香港陥落ニュースに続き機を逸せず「香港落ちたり」のニュース歌謡が放送され、そのスピード振りに人々のお目を瞠らせた事は近頃ほほえましい話題である。中一日において二十七日夜奥村情報局次長の「香港陥落の意義」はいつもながらきびきびした熱ある話に感激しましたの投書が多かった。

こうした投書の反響から、現在の小中学生を対象とした「少国民の時間」や家庭の主婦を対象とした「家庭主婦の時間」でも元軍人の講話を中心に番組が構成されていたことがわかる。これらの番組を通じてあらゆる世代・立場の聴取者から戦勝を盛り上げる番組に高い評価が集まっていたことをみると、放送を通じて全世代を挙げての戦争協力体制が築き上げられていったことが見て取れる。

また当日の戦況をその日のうちに歌謡曲として放送していた戦時歌謡も好評だった。この戦時歌謡の制作には古関裕而をはじめサトウハチローといった戦後、文化芸術の分野で活躍した著名な作曲家や作家がこの制作に携わっていた。その日の戦況をニュースの後に即時に楽曲として放送に載せるという、まさに離れ業で作品を電波に乗せることで市民

の戦争への熱狂を支えていた。ただ80年後の私たちから見ればそれは決して「ほほえましい話題」とはいえないだろう。

また「いつもながら好評」だった奥村情報局次長は当時放送内容の検閲を担っていた情報局の中心的人物で、たびたびラジオで講演を行っている¹⁵⁾。いわゆる思想戦の最前線を担っていたともいえるが、注目すべきは奥村が軍人ではなくもともと逓信省の官僚だった点だ。奥村が民間人として戦争の意義や銃後の国民の心構えを放送の中で繰り返し戦争完遂を国民に訴え続けたということは、まさしく軍民一体となってこうした放送が行われていたことを示している。いずれにしてもこうした戦時色の強い放送を当時の国民の多くは「好ましいもの」として受け止めていた様子がうかがえる。

4章 国民が放送に望んだもの

放送に対する要望を『放送』『放送研究』誌面の投稿欄の中から拾っていくと、当時の国民がこの戦争をどう認識し、何を放送に求めていたのかが見えてくる。

特に開戦直後の聴取者の意向を知ることができる興味深い記事がある。『放送研究』（1942年2月号）の「一頁研究・反響」では、たびたび投書を送ってきた東京近郊在住の常連の投稿者9人を集めて「投書家懇談会」を開いたとの記述がある¹⁶⁾。開催されたのは1942年1月31日、この席で寄せられた放送への要望は次のようなものだった。

- 1) ニュースの放送回数は多いほど結構
- 2) 時事問題の解説はできるだけ繰り返し徹底してほしい
- 3) 講演は抽象論より具体的に
- 4) 南方の問題はどしどし願う
- 5) 隣組の時間を設けてはどうか
- 6) 勤労者にもっとラジオは積極的に働きかけてほしい
- 7) 長期戦下の国民に笑いを送ってほしい

8) 演芸は明朗で善良なものを喜ぶ

1)、2)、4) は戦時下という日々緊張状態にある中で、戦況や世界情勢についていち早く情報を知りたいという市民としては当然の要望だが、興味深いのは講演番組に関する要望、3) である。開戦以降の放送番組表を見ると、確かに軍人や官僚の講演番組が数多く編成されている。特に開戦1か月後、最初の「大詔奉戴日」である1942年1月8日20時から放送された海軍大佐・平出英雄の講話「世界を開く日本」には多くの好評意見が寄せられたという記録がある。『放送研究』(1942年2月号)には「『これこそ日本人の魂の雄たけびです』といずれもわが海軍の血のにじむもう訓練の賜に感謝し、感激に綴られた投書であった」との投稿があり、当時の国民が軍人の講話を熱心に聞いていた様子がうかがえる¹⁷⁾。軍幹部による講演番組はニュースとともに当時の市民にとって戦況を知る重要な情報手段の一つだったこともあり、どの番組にも多くの反響があった。ただ投書の中にはこうした好評意見だけではなく批判的な意見も寄せられている。放送された講演の内容と表題があっていないという指摘だ。聴取者から寄せられた意見は次のようなものだ¹⁸⁾。

「レキシントン轟沈」という5月28日夜の竹崎海軍大佐講話は演題の魅力を裏切るものがあった。放送という仕事だけは昔の大衆雑誌の無責任な誇大広告のようになってはならぬ。(中略) こういう時の聴取者の失望は他の放送講演予告に対してまで猜疑的な要慎(ようじん)を堅めさせる。

このようになかなか手厳しい指摘も載せられている。1944年に広島局から放送されたこの講話の詳細は残存している資料がないため内容をたどることができないが、5月28日は当時の海軍記念日の翌日だったので、聴取者は海軍の武勇伝を期待していたものと思われる。投書の指摘から推測すると「轟沈」という表現に対し講話の内容が投稿者の期待に反するものだったようだ。ここからは憶測にすぎない

いが、戦時中の番組にしてはやや抑制的な内容でありそれが不評につながった可能性がある。いずれにしても当時は情報局の検閲の下で放送していたにもかかわらず、放送を出している側の思惑通りに聴取者が受けとめていなかった番組があったことは興味深い。要望の方向性は別として、この時代にも放送倫理的視点から意見を持っていた国民がいたという事は注目に値する。視点を変えればこの時点で放送を出す側の意図と受け止める側の意見の間に乖離が生じており、戦時放送が一方向的に世論形成を目指すという方向性に微妙な変化が生まれたとみる事もできそうだ。

ところで、前出の「投書家懇談会」で出された要望はその後実際に放送に反映されていく。4)の南方の問題については、1942年1月に放送された「陥落直前のシンガポール」「南方圏の経済」「マレーの話」などが放送後の投書でも好評だった。やはり日本軍の進軍先の情報を聴取者が求めていたことがわかる。

5)の要望にあった「隣組の時間」についてもこのあと実際に番組が始まっている。それが隣組の定期的な連絡会である「常会」開催にあたって国からの必要な話題を提供する番組として1942年4月から放送が始まった「常会の時間」である¹⁹⁾。「常会の時間」は1941年7月からすでに始まっていたが、その後太平洋戦争開戦後はいったん姿を消していた。もともと隣組制度は1940年9月に内務省が国民統制を図る目的で町内会などを基に作られたもので、事実上大政翼賛会の最末端組織である。「常会の時間」は全国の隣組にむけた講話など地域の活動についての情報を伝えるため、大政翼賛会の政治家や官僚がたびたび出演していた。当時の番組表によると第1回目の「常会の時間」は4月1日の夜7時40分から20分間の番組として放送された。この日は「翼賛選挙貫徹一斉常会」の副題がついており、湯澤内務大臣の講話などのほか大政翼賛会組織局長による「翼賛選挙の誓朗読と常会申合せに関する注意」という項目が放送されている。「常会の時間」はこのあと4月8日の「大詔奉戴日」にも同時刻で放送されており翌5月から7月までは毎月8日

の大詔奉戴日に、8月以降は毎月7日に放送されている。国家総動員体制における隣組の重点活動方針はこうした番組を通じて国民に伝えられていた。

6) の勤労者に働きかける番組としては1943年11月1日から毎朝5時40分の放送開始直後に「産業戦士の方へ」という番組が始まっている。戦争の長期化によって物資・食糧が不足している中で、増産体制の強化を目的に工場や農業の現場を鼓舞することを目的に放送開始時間を20分繰り上げて始まった番組だ。内容は工場など生産現場での生産性向上の取り組みや生産に向けた心構えなどを企業の経営者や官僚、学者の講話として放送していた。この番組に先立って10月には「産業戦士慰安の夕」が大阪の航空機関係の軍需工場から中継された。このあと「産業戦士の夕」は月1回の定時放送が始まる。このほか「農村慰安の夕」「漁村慰安の夕」「通信戦士慰安の夕」と様々な産業従事者をつなぐ「夕」シリーズの番組が放送されていく。いずれも音楽や演芸、講談などで構成されており労働者の「慰安」を目的としていた。こうした番組も銃後の市民が戦争完遂という目的に協力しているという実感を持たせるには効果的であったに違いない。

この座談会での要望とは別に、『放送研究』（1942年4月号）の「一頁研究 反響」には次のような記述がある。

国内における適性排除の声は必然的に外国語排除の声となり2月3月中の投書の中で最も目につくのは外国語の問題である。国語尊重の意味と敵国に対する態度から断然英語を締め出せというのである。即ちニュースアナウンサー、テキスト等を速やかに適当な日本語に替えられたいと要望している。

同様の投書は相当数が開戦以降『放送』へ寄せられており敵性語排除の声は多くの国民の間で広まっていた²⁰⁾。実際に放送からアナウンサーやニュースという言葉が「放送員」「報道」と置き換えられるのは1943年4月からである。こうした投稿の傾向を見ると「敵性語の排除」の動きは軍部や行政か

らの要請ではなく、聴取者である一般国民からの要望が大きく影響したと考えられる。実際にはすべての英語が日本語に置き換えられたわけではなく、もちろん法的根拠もないので「ムードとしての銃後の戦争協力」の一つとして敵性語の排除が進んでいったというのが現実だろう。これは戦時中における銃後の世論が放送の編集権を支配したともいえる象徴的な出来事だった。なお「投書家懇談会」はこのあと3月と8月に東京放送局で開催されている。ただし戦況の悪化とともに聴取者の意見についての分析や記事は1944年以降減っていく。

5章 前線と銃後を結んだ「前線へ送る夕（ゆべ）」

前章で見てきたように、戦時下での放送に対して一般国民は様々な要望を放送局に求めている。もちろん放送は当時の情報局の統制下で行われていたもので、番組編成は軍部や官僚の管理下にあった。しかしその一方で全ての放送が情報局からの指導によってのみ作られていたわけではなく、聴取者である国民が望んだものでもあった。聴取者からの声は少なからず番組の内容に反映されていた。

こうした中で銃後の国民が直接前線の兵士を慰問するという名目でスタートした「前線へ送る夕」は銃後の市民が戦争をどのように意識していたかを考える上で大変興味深い番組である。第2章でふれたように前線の兵士と銃後の国民をつなぐ番組はドイツで放送された番組をモデルとして日中戦争の時から不定期番組として始まった。そして太平洋戦争開戦後は1942年8月に「前線銃後を結ぶ」という番組が放送される。第1回の放送があった8月25日の番組表によると、21時のニュースに続いて次のような放送が行われた。内容は以下のように前線の兵士とその家族やふるさとの銃後の人たちとやり取りする形になっている。

午後9時
・ニュース

・前線銃後を結ぶ

- 1) 銃後の父へ 中支派遣陸上等兵 ○○○○
前線の子へ 静岡県駿東郡大岡村ニッ谷 ○
○○○
- 2) 銃後へ バタビヤ陸軍一等兵 ○○○○
前線へ 大分郡東国東郡来浦町大字濱在
郷軍人分会長
○○○○、○○○○一等兵の妹
- 3) 銃後の妻へ 中支派遣陸軍上等兵 ○○○○
前線の夫へ 東京市品川区大井瀧王寺町 ○
○○○

なおそれぞれの出演者は番組表上では実名で掲載されているが本稿では匿名(○)とした。放送までの流れは次のようなものだった。まず戦地に派遣されている放送局の録音隊が、前線の兵士に銃後の家族・縁者に向けたメッセージを書いてもらい本人に読ませる。それを録音したレコード盤を国内に持ち帰り、銃後の家族など関係者に聴かせて今度は返信のメッセージを録音して放送、という段取りだった²¹⁾。この番組について『放送』(1942年9月号)の「放送局だより」によると、「8月25日から28日までの4日間にわたり国内全国および東亜各地の前線に向けて放送され多大な好評を博した」という記述がある²²⁾。ただし番組表にはこの番組名では8月26、28日の放送記録はなく、25、27日の2日間は放送が確認できる。続く1942年9月の番組表を確認すると「前線銃後を結ぶ」というタイトルの番組は7回放送されている。うち9月23日に放送された回は「前線銃後音楽交換」(前線銃後を音楽で結ぶ)というタイトルで、北京と東京から2元中継で行われている。演奏は北京側が北京音楽文化協会、東京側は星桜吹奏楽団となっている。この放送についても『放送』(1943年11月)の聴取者の声で好評意見が掲載されている²³⁾。ところで『放送研究』(1942年9月号)の「一頁研究 実況録音」にこの番組の企画意図が述べられている。一部を抜粋する。

この企画は既に2年前、「前線から銃後へ、銃

後から前線は」と題して提案されたものであるが、支那事変が大東亜戦争に進展するとともに、今日その企画が具現化して実現されることになったものである。(中略)多くの男が遠く家郷をはなれて遠征している。残された者と遠く出陣した者とは、徒な感傷に流れて戦いをおろそかにしてはならない。しかし戦が進展すればするほど、この二つのものは固く結ばれなければならない。絶えず循環する暖かい血液が、前線銃後を一つのものにしていなければならない²⁴⁾。

こうした感情に訴える手法は情報局をはじめ軍部の期待通りに多くの銃後の国民に前線との一体感を生み出していく。このあとも「前線銃後を結ぶ」は不定期に都度放送されていく。さらに1943年1月になると「声の慰問袋」の名目で演芸や音楽などを盛り込んだ「前線に送る夕」が定時番組としてスタートする。この番組はそれまでの「前線銃後を結ぶ」よりもさらに前線の兵士への慰問という演出を前面に押し出している点が異なる。この番組について『放送』(1943年2月)の「放送番組のお知らせ」では、「声の慰問袋として演芸音楽の特別番組を月に2回(7日と24日の夜)お送りして前線の兵隊さんに日本内地の皆様とご一緒に聴いていただきます」と説明されている²⁵⁾。

「前線に送る夕」は1943年1月7日20時から第1回目の放送が行われる。番組は日本から音楽や演芸などを通じて戦地の兵士を国際放送の電波を通じて放送で慰問する事に主眼が置かれた。番組を戦地の兵士と銃後の国民が同時に共有することで、国を挙げて国民が一体となって戦争に協力すべしという意識を認識させることに焦点がおかれていたことがうかがえる。

第1回の「前線へ送る夕」は東京の日比谷公会堂からの中継だった。このあと毎月7日(同年8月以降は9日に変更)と24日の月2回の定期番組となり、そのうち1回は今回のように公会堂などの会場に従軍兵士の家族などを集めて公開番組として放送された。7日の番組表によるとこの日の構成

は以下の通りだった。

午後8時

- ・前線へ送る夕 一日比谷公会堂より中継
- 一、管絃楽日本交響楽団 指揮 坂本良隆
 - (1) 行進曲「艦隊勤務」 江口夜詩作曲
 - (2) 盆踊幻想曲 伊藤昇作曲
- 二、前線将兵の皆様へ（スタヂオより）丸山鶴吉
- 三、落語 錦名竹三遊亭金馬
- 四、歌謡曲 東京放送管絃楽団 指揮 服部良一
 - (一) 高峰三枝子
 - (イ) 南の花嫁さん 藤浦洸作詞 古賀政男作曲
 - (ロ) 宵待草 竹久夢二作詞 西条八十補作 多忠亮作曲 仁木他喜雄編曲 市丸
 - (二) 市丸、他三味線
 - (イ) 伊那節
 - (ロ) 龍峽小唄 白鳥省吾作詞 中山晋平作曲
 - (三) 轟夕起子
 - (イ) 風は海から 西條八十作詞 服部良一作曲
 - (ロ) 松島音頭 西條八十作詞 山田耕筰作曲

この日の出演者は落語の三遊亭金馬、後半の歌謡曲の項目では高峰三枝子や市丸、轟夕起子など当時のスターが名を連ねており、この時代の看板番組だったことがうかがえる。「前線に送る夕」ではそれまでの「前線銃後を結ぶ」のように特定の兵士と家族縁者のメッセージのやり取りはないが、この日は「前線に送る夕」に続いて21時のニュースの後に「慰問袋ありがとう」という番組が放送されている。

「前線に送る夕」にあらためて注目すると、毎回当時は代表する歌手・落語家・俳優たちが出演している。当然番組を聞くことができた前線の兵士たちはこうした演芸などを「声の慰問」として喜んで受け止めたことだろう。しかし既に戦況は悪化しており2章でも触れたように電波事情も悪い中で、前線でこうした放送を聞いた兵士はそう多くはなかったはずだ。

前述の通り月2回の放送のうち月1回は公開番組として観客を入れた形で放送され、もう1回は

スタジオベースでの放送だった。内容は毎回異なっているが、ラジオ劇と音楽、または落語などの演芸と音楽など様々な組み合わせだったことが番組表の記録からわかる。

ところでこの番組にはこの時代としては珍しい、一般市民からの公募によるコーナーも登場する。それは「前線に送る謎々」である。こんな戦争の最中に前線に向けてなぞなぞとはどういうことかと思わざるを得ないが、この企画は聴取者から好評だったようだ。

『放送』（1943年9月号）にはこの「謎々」について次のような懸賞募集の記事が記載されている²⁶⁾。

銃後の心を込めた電波の慰問「前線へ送る夕」は非常な好評を博しておりますが、その中でも兵隊さんの頭を捻らせる「謎々」は素晴らしい反響を呼んでいます。「前線の兵隊に呼びかける謎々こそは慥（たし）かに前線と銃後の心の交流を図る最適のものだ」といわれています。つきましては皆様のお知恵を拝借して前線へ「謎々」の慰問を送りたいと存じます。

この記事によると優秀作品は放送に採用し、入選作品は「放送」を通じて前線に届けることになっている。募集に際して記事には「前線と銃後を結ぶ絆となる家庭的にして明朗健全なる題材なら何でも構いません」と書かれている。

この記事には実際に放送されたなぞなぞが次のように例題として掲載されている。

問い：近頃前線では加藤清正が非常に活躍しているそうですね。いったいこれはどういう事でしょう？

答え：トラック

現代人にはいささか難解だが、加藤清正の虎退治と当時日本軍が一大拠点を築いていたトラック諸島に引っ掛けた問題だ。この募集には多くの反響があったようで、『放送』（1943年10月号）には、9

月の放送で採用されたなぞなぞが紹介されている²⁷⁾。そのうち優秀作と入選作の問いに対して正解が11月号に掲載された²⁸⁾。以下はその一部である。

問い：アメリカやイギリスの兵隊が持っている服で日本の兵隊さんにはないという服はどんな服でしょう？

答え：降服（降伏）

問い：ルーズベルトとチャーチルが会談の席上で使う靴は革靴かゴム靴か、それともなかに。

答え：屁理屈（へりクツ）

ある意味ではほほえましくもあるが、実際に前線の兵士がこの放送を聞いた時、どのような思いを持ったのだろう。それも放送が聞ければという前提になるが、いずれにしてもこのような演出は前線兵士の慰問という以上に「前線を支える銃後の国民」という意識を共有させることが一番の目的だったと考えられる。特に1943年10月には学徒出陣壮行会が行われるなど銃後の空気は開戦時とは全く異なっていた。その中で放送はこうした番組を通じて国民とにかく前線との一体感を作り出していた。もはや銃後の国民は現実の戦場とは異なる「ラジオの中の戦場」で戦争を支えていた。その意味では「前線へ送る夕」は放送を出す側と銃後の聴取者のニーズを戦争協力という一つの方向に結び付ける上で成果を上げたとみる事ができる。

銃後の国民が一丸となって番組を支えた「前線へ送る夕」は1945年7月24日が最後の放送となった。この時の構成は「戦意高揚盆踊り大会」と「講演 家康と彦左」という項目が並んでいる。ただこの「戦意高揚盆踊り大会」の模様もすでに中継ではなく「某工場」での録音となっている²⁹⁾。

実は長崎に原爆が投下された8月9日にも「前線へ送る夕」は放送が予定されていた。しかし番組表には斜線で項目が消され放送が中止されたことが記録されている。その横には「日ソ開戦による番組変更」との手書きがあり、ニュースなど別番組に差し替えられたことが記録されている。こうして前線

と銃後をつないだ番組は終焉を迎えた。

6章 おわりに

番組表に残された番組編成を見ていくと、日中戦争に始まる「戦争と放送」の関係は太平洋戦争開戦によって一段と巧妙に国民を戦争にかかわらせることに力を注いでいたことがわかる³⁰⁾。銃後の国民はラジオを通じて前線の兵士とともに戦争の当事者となった。さらに隣組のような市民の相互監視機能が働いている中で、多くの国民は戦争の意義や国民としての心構えなどを繰り返し放送で聞かされ続けることにより、必然的にその思考は戦争協力に流されていった。結果的に放送は何か何でも戦争に協力しなければならないという人々の思考停止状態を形成したことは否めない。またこの時代の国威発揚につながる放送は単に軍・官僚によってのみではなく、多くの国民自らも求めていた。

開戦の歓喜をあおった放送も1943年以降になると情報局から、いたずらに国民に楽勝ムードをあおるような内容は控えるように指導が入る³¹⁾。それまで正しい情報を秘匿して都合よく連戦連勝を伝えてきた放送は一転、銃後を挙げて総力戦に備えることに重点が置かれるようになっていく。「前線へ送る夕」はそうした時代の産物でもある。

今から80年前の日本は放送によって踊らされたと同時に、国民自らも戦争を肯定する番組を望んでいた。この時代からわかることは、いったん戦争という非日常が身に迫った時、多くの市民の「正義」や「良識」の物差しは客観性を失っていくということだ。その意味でこの時代の放送を振り返って現在を見たとき、日常の中で一方的に押し寄せる情報を客観的に判断するためのメディアリテラシーの重要性をあらためて感じる。たとえば現在のウクライナや、中東情勢を伝える報道も、情報を出す側も受け止める側も各国の利害関係の中で客観性を失ってはいないだろうか。そういう視点を持つことの重要性を80年前の番組表は語っているように見える。

【注】

- 1) 1941年12月8日の大阪第1放送版の番組表には当初予定されていた番組表に続いて、東京第1放送版にはない開戦による番組変更版が残っており通常の番組が大幅に変更されていることがわかる。番組編成の詳細は『20世紀放送史（上巻）』（NHK）149頁で確認できる。
- 2) 『20世紀放送史（上）』（NHK）、146頁
- 3) 『20世紀放送史（上）』（NHK）、148頁によるとこの日のニュースの放送時間は定時に加え臨時ニュース11回、合わせて4時間40分に及んだ
- 4) 芝浦での仮放送所での放送開始後、同年7月15日に現在NHK放送博物館のある愛宕山に東京放送局局舎が開局し本放送が始まる。
- 5) 二・二六事件における放送の経緯については『放送五十年史』（NHK）100～104頁に時系列で詳細が記録されている。
- 6) ナチスのプロパガンダ放送が日本の放送に与えた影響については竹山昭子『戦争と放送』、社会思想社、1994年、23～45頁に詳しい。
- 7) 『日本放送史（25年）』（NHK）、414頁
- 8) 『放送五十年史』（NHK）、115頁
- 9) 同上
- 10) 『放送五十年史』（NHK）、122頁に慰問放送が前線で実際にどのように聞かれていたのかについての考察と、1938年春に南京付近で実際にラジオを聴取した兵士の証言が記載されている。
- 11) 雑誌『放送』では「聴取者の声」、『放送研究』では主に「一頁研究 反響」として連載されており、後者は聴取者からの声を分析した内容が中心となっている。
- 12) 『放送』（1942年1月号）では「大詔を拝し奉りて」を読み上げる東条首相の写真が冒頭の特集ページを飾っている。
- 13) 『放送研究』（1941年12月号）、126頁 この号は12月15日発行だが、8日の開戦の放送についての反響を異例の速さで掲載していた。
- 14) 『放送研究』（1942年1月号）、118頁
- 15) 奥村次長のラジオ講演については『放送研究』（1942年12月号）の中で95～100頁にわたり「奥村放送」の反響」として情報局嘱託職員が企画記事を寄稿している。
- 16) 『放送研究』（1942年2月号）、120頁「一頁研究 反響」の記事によると、懇談会は東京放送局の局長応接室で午後1時半から開催された。
- 17) 同上 平出大佐の講演の内容はしばしば放送後に『放送』誌面にその内容が再掲されている。
- 18) 『放送』（1944年7月号）、46頁
- 19) 『放送五十年史』（NHK）、138頁
- 20) 『放送研究』（1942年4月号）、118頁 「『大東亜共栄圏は日本語で』の叫ばれている時（ママ）、指導機関たるラジオに国民の関心が集まるのも当然の事であろう」との記述がある。
- 21) 『放送研究』（1942年9月号）、7～8頁
- 22) 『放送』（1942年9月号）、109頁
- 23) 『放送』（1943年11月号）、134頁 「聴取者からの声」に「軍旗と共に」「入道雲」などこの日演奏された曲に対する好評意見が寄せられている。
- 24) 『放送研究』（1942年9月号）、71頁
- 25) 『放送』（1943年2月号）、118頁

- 26) 『放送』（1943年9月号）、77頁
- 27) 『放送』（1943年10月号）、95頁
- 28) 『放送』（1943年11月号）、67頁
- 29) 1945年7月24日の手書きの番組表に「（録音）～某工場にて～」と記載されている。
- 30) 『放送研究』（1943年7月号）、6～8頁に「戦時放送機構への想念」という記事があり、この中で「企画、編成、実施という一連の放送行為が、国策的な要請に基づいて戦時下の国民生活の中に食い込んでいく深度、即ち放送の国策性ないし指導性の強化の必要が増大すればするだけ、聴取者との結びつきも真剣に想念されなければならない。」との記述がある。筆者は当時の宮崎放送局放送係長だが冒頭の項目には「一発必中の効果を上げねばならぬ」というタイトルがつけられており、当時の放送事業者が国策に積極的にかかわっていた姿勢が読み取れる。
- 31) 『放送五十年史』（NHK）、163頁

参考文献

「ラジオ番組確定表 東京・大阪」（本稿では番組表と表記）、NHK所蔵資料